

# 発 明 文 化 論

〈第 73 回〉

丸山 亮

## 神 話 の 力

神話の故郷といわれる宮崎県の高千穂を旅してきた。断崖に挟まれた高千穂峡の川面をボートで行き、崖の上から落ちてくる真名井の滝の水しぶきを浴びながら、兩岸の紅葉を仰いだ。ひむか神話街道を車で進むと、棚田が広がり、天に連なっているように見える。天孫降臨の神話が生まれたのはこんな場所だ。

天岩戸神社の近くに宿をとり、夕食になる。苫屋の形をした入れ物の蓋を持ち上げると、神楽煮しめと名付けた野菜の煮しめが現れる。古代黒米を使っただんや飯も膳に並んだ。食事を通じて神話時代を味あわせてくれる趣向になっている。

夕食を終えて夜道を歩き、公民館で行われている夜神楽の見物に出かけた。この辺りには集落ごとに二十いくつも神楽を催すところがあり、農閑期となる 11 月から 2 月までの毎週末、各地区の公民館や個人宅を回りながら興業するという。演者の人数がそろわないときには、互いに人を融通し合うこともあるらしい。平安時代から伝わり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

かがり火が焚かれた入り口から会場に入る。板敷の床の奥にしめ縄を張ってしつらえた空間では、脇の太鼓と笛を伴奏に、天岩戸の神楽が舞われている。神楽はじめの舞、神降ろし、鎮守、岩戸開きなど三十三番が夜通しで行われる。客席には、大皿に盛った焼きたての椎茸や竹筒に入った酒がふるまわれ、にわかのおもてなしとなり神事に参加している気分になる。若者が交じる舞手たちは、ときどき雑談したり笑ったりしているように見える。天岩戸に隠れた天照大神を外に出そうと陽気な宴を繰り広げる伝説を踏まえた演出かも知れないが、くつろいだ雰囲気を感じさせる。

天岩戸の神話は古事記のほか、日本書紀にも取り上げられている。日本書紀では一書に曰く、一書に曰く、と類話を重ねているので、この話は古代から各地に広がっていたのであろう。天照大神が隠れた岩戸をちょっと開けるのを待っていた手力男神は力任せにその戸を引き開け、どこかへ投げ捨てる。その岩戸が落ちたのは九州とも、信州の戸隠山ともいわれる。戸隠から遠くない安曇野に信濃富士、有明山がある。岩戸がこの地に落ち、天下が明るくなったので山をそう呼ぶと言い伝え、山頂には手力男神を主祭神とする奥社を置く。地元の子供たちは、今日こうした神話を素材に、版画などを描いている。

天照大神の孫にあたるニニギは、豊葦原瑞穂国を支配するように命じられて、高千穂に天下ったとされる。高千穂神社をはじめ、日本各地の神社が神話とのつながりを強調しているのはいうまでもない。神話のモチーフは今なお私たちの想像力を刺激する。梅原猛が書き下ろしたスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」も、神話に想を得たものだ。さらにこうした神話は朝鮮やユーラシアの神話とも共通するものがあるようで、互いの影響関係に興味を持たれる。

西欧に目をむけると、ギリシャ神話はローマに受け継がれ、今日に伝承されている。そしてその過程で、文化に多大な影響を及ぼした。神殿などの建築や絵画、町の噴水の彫刻にまで、神話モチーフは容易に見いだされる。

ルネサンス期にイタリアで生まれたオペラも、神話を題材としていた。オルフェ神話はとくに好まれたようで、モンテヴェルディの「オルフェオ」が代表的だが、19 世紀になるとオッフェンバックによるパロディー「地獄のオルフェ」（天国と地獄）が現れる。20 世紀後半にはジャン・コクトーによる映画「オルフェ」となるほか、リオデジャネイロが舞台の「黒いオルフェ」も忘れられない。北欧神話を題材にしたものでは、ワグナーの「ニーベルングの指環」が代表作だろう。

神話はどんな民族も大切に受け継いできており、それを生み出した心性は今日に至るまで、文化的な創造の源となっている。高千穂を歩いて、そのことを強く感じた。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)